

人を指導するのは誠に難しいものである。ネジを締めるのと同じで、緩ければ外れてしまいうし、締めすぎれば、ちぎれてしまいます。先達も同じです。

先月はありがたくも四国霊場を逆打ちしてまいりました。一応四年に一回逆打ちで廻ります。一回で全て廻ります。此れが当山の修行です。古今和歌集に、紫式部は一首「たが里もとひもや訪れて来るほど改す」と郭公心のかぎり待ちぞわびにし」。西行法師は「きかずともここをせにせん郭公山田の原の杉のむらだち」、「山田の」を四国のに変え、郭公を鶯に変えれば我々同行が行く先々で遭遇した気持ちにびったりです。何回四国の霊場を巡錫した事であろうか、常に初回・初心であるため記憶に有りません。幾度ごと「二期一会」です。必ず初めての体験が与えられます。一期一会とは、一生に一度の出来事、二度と無い、時空を超えての御縁が頂けるのです。今回も千載一遇の機会を与えて頂き、数カ所で貴重な体験を見せて頂きました。同行の喜びと感激は言葉では表現できません。井伊直弼は「一期一会」を茶会に例えて「たとえ幾度おなじ主客と交会するも、今日の会に再びかえらざることを思えば、実に我れ一世一度の会なり」と言っています。私どもは、ほぼやり直しの利かない人生を歩んでいます。やり甲斐・生き甲斐のある人生にしようとか各自一生懸命頑張ってみえる事でしょう。ただ怖いのは、此の世は「五濁悪世」と行って五つの厄難があります。その一つに誤った見解思想を抱く人々が増えるようになる。それが災難につながっていくという事です。経に五蘊あり、「色・受・想・行・識」の五つです。色は人間の肉体、受は感受作用、想は表現作用、行は意思作用、識は認識作用です。それぞれに正常な働きができて、生かされている事を実感でき、初めて生き甲斐のある人生を歩めるようになります。生きがいを見出す人はやがて煩惱の炎に燃やされ心貧しき人生に落ちて行くようになってしまいます。財多き家庭に多いのが相続でもめ、やがて煩惱のいたずらに惑わかされ兄弟が分裂して終わるのです。親は財産を子の為に残したことを悔やむのです。死んでも死にきれないとは此のことです。財産は使ってゆくか、生前に、自分の良いように分けていくことです。経に「富めりといえども貧し」とあります。貧しに成らないように。今や、物質文明の虜に成ってしまい、精神文明が置き去りに成ってしまいました。心に痛みを抱える人が増えてきました。当然の結果です。松の翠と同じように、変わらぬ心は信用できます。日本人の良いところ、義理人情や親切心を持ち続けたいものです。

今に寮歌を聞けば青春の頃が思い出されます。旧制一高の寮歌に「剣と筆とを取り持ち一度起きたば 人生の偉業成らざらん・・・濁れる海に漂へる 我国民を救わんと 逆巻く浪をかきわけて・・・梶とる舟師は変わるとも 我の舟は永久に理想の自治に進むなり」。旧制第二高の寮歌に「この天地になみだつつ ああ逍遙にすぎし身ぞ 我が青春の姿なれ」。旧制松本高等学校の寮歌に「いざ朗らかに歌いて行かむ 野に満る 大地の命ふみしめて・・・真理の声を聞く 我魂のほこらかさ」。又、北海道大学の寮歌に「人の世の 清き国ぞと あこがれぬ 都ぞ弥生の雲紫に・・・」。それぞれ寮歌には青春の「理想の信念」が込められています。